

141. 昭和60年度滋賀県下に おける発掘調査の紹介 その2

13. 玉類・石敷遺構を持った堅穴住居跡

高月町 高月南遺跡

町教委では、前年度より継続して工場・倉庫等の建設に伴い、高月南遺跡の発掘調査を実施しており、その簡単な概要を述べる。現在、約 8,000㎡の調査が終了しており、弥生中期の方形周溝墓4基・壺棺1基、後期の堅穴住居6棟・方形周溝墓40基・土壙墓1基・壺棺1基、古墳前期の堅穴住居1棟、古墳中期末より後期の堅穴住居90棟、7世紀前半の堅穴住居5棟、平安期の井戸4基のほか各時代の掘立柱建物群、溝、土壙が多数検出されており、今後の調査においてそれぞれの時期の遺構が多数発見されるのは明らかであり、徐々に一大複合遺跡としての認識が深まりつつある。今年度の調査での最大の特徴は主として5世紀後葉～6世紀中葉の堅穴住居の埋土・床面・土壙・ピットより出土した祭祀関連と考えられる遺物である。滑石製の白玉・管玉・勾玉・有孔円板・紡錘車、緑色凝灰岩製の管玉・勾玉・ガラス玉、土製模造品(鏡)及び小鍛冶滓、製塩土器、ベンガラ朱、ミニチュア土器、移動式カマドがある。特にCRTA区第11号堅穴は一辺8mとやや大型で西壁中央より約50cm東寄りの床面に1～10cmの河原石を直径約70cm程の円形に敷き詰めた遺構があり、その周辺で玉類が比較的多く発見された。



高月南CRT-A区

また、この堅穴の周囲を廻るような幅20cmの溝状遺構が確認されている。これらのことは5世紀後葉～6世紀中葉の時期にこの遺跡において祭祀集団の居住地であったこと、及び、その内でも第11号堅穴がその中心として集落長(シャーマン)の住居、あるいは社的人格の建物が想定される。さらに湖北地域の遺跡の相関関係を考慮すれば、伊香氏の拠点集落としての位置づけも可能であろう。

その他の弥生時代中・後期の集落と墓域(方形周溝墓)、古墳時代前・中期の集落と墓域(土壙墓・周溝墓等)、奈良時代前期以降の遺跡・集落のあり方・性格等の解明が今後の調査・研究の課題となろう。

(高月町教育委員会 黒坂 秀樹)

14. 弥生時代の方形周溝墓と平安時代の井戸・土壙

長浜市 鴨田遺跡

鴨田遺跡は、弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡としてよく知られている。

昨年、団体営は場整備事業にともなう事前調査を実施した。その結果、弥生中期～古墳前期の土器や、石器、木器を包含する多数の水路、土壙を検出した。また時代不明の掘立柱建物1棟を検出した。

今回の調査は、昨年に引き続くもので、遺跡の北部が対象範囲である。現地調査は、昭和60年6月3日から5か月間を要し、調査面積は約4,300㎡におよんだ。検出した遺構は、遺跡の北西部のものと、北東部のものに分けられる。

北西部の遺構は、多数の自然・人工の水路や、土壙、柱穴などである。水路は、弥生中期～古墳前期のものと古墳時代後期のものがある。土壙、柱穴は時期不明。



厨子地区・方形周溝墓

北東部の遺構は、田圃中に畑や雑木林として、一段高くなっている地区で検出された。弥生時代と平安時代の遺構がある。

弥生時代の遺構は方形周溝墓で、中期～後期のもの5基である。主体部は未検出である。平安後期の遺構は、旧河道や人工水路、井戸や土壌である。旧河道は調査地区を2分している。人工水路は、地区の北西辺をL字形に画するように、平行して走る2条の水路などがある。井戸は3基検出され、うち2基は円形素掘りで、底部から平安後期の土師器皿が出土した。残り1基は円形石組みであるが、時期は不明である。その他方形、不定形の土壌が検出された。平安後期以降の遺物を含んでいる。また、1体分の獣骨を埋めた土壌も検出した。

遺物は、弥生中期～後期の土器が大半を占め、古墳後期、平安後期のものがそれに続く。平安後期のものは、ほとんどが、土師器皿（灯明皿）である。木器では櫓などが出土している。

（長浜市教育委員会 中井 寛明）

15. 奈良時代の絵馬

長浜市十里町 十里町遺跡

十里町遺跡は、縄文時代中期～平安時代の遺跡として知られ、長浜市の北西部に位置する。

今回の調査は、団体営は場整備事業にともなう事前調査である。今回の調査範囲は、遺跡の中央部から西辺部にかけてで、約1,600㎡について調査を行った。

検出した遺構は、古墳時代前期と奈良時代の二時期に大別される。

古墳前期の遺構は、主に遺跡の西辺部で検出された。井戸2基、多数の水路、土壌などである。井戸のうちの1基は、円形素掘りで、直径1.8m、深さ1.9mを測る。埋土中より、庄内期の多量の土器や、火鍔白などの木器が出土している。また、人工・自然の水路からも、古墳前期の土器群を検出している。

奈良時代の遺構は、縦横に掘られた多数の小水路や、自然水路、土壌などで、遺跡の中央部北寄りで検出した。小水路は、幅0.4～0.5m、深さ0.1～0.4mを測り、

ほぼ直線的に、縦横に延びている。遺物の量は極めて少ない。土壌は、だ円形を呈するもの1基である。復元長径1.2m、短径0.8m、深さ0.65mを測る。最上層から、奈良時代末の須恵器とともに、絵馬が出土した。

次に遺物について述べる。遺物の大半は、古墳前期の土器と木器である。なかでも、前述の井戸から出土した土器群は、庄内期の良好な一括資料である。奈良時代の遺物は少ない。主に須恵器杯、蓋、木器では曲物などがある。また、絵馬は縦16.8cm、横23.7cm、厚さ0.7cmを測る薄板で、中央上端に小孔が穿たれている。絵は、画面いっぱい、墨で左向きの馬の姿を描いている。写実性に富み、繊細な筆の運びで馬の表情をよくとらえている。遺存状態は良好である。

（長浜市教育委員会 中井 寛明）

16. 柱の残る平安時代の掘立柱建物検出

長浜市 新庄馬場遺跡

新庄馬場遺跡は、長浜平野の北西部、姉川によって形成された扇状地上に立地する。新庄馬場町集落の西端の八坂神社境内に塔心礎が残存し、以前より水田・畑より布目瓦が出土しているらしく寺院の存在が予想されていた。

今年度の県営は場整備事業に伴いこの神照西工区新庄馬場地区がその対象区域となり、事前に発掘調査を実施することになった。調査は4月末から6月にかけて実施し、その結果、八坂神社より北50mの水田中より約1,000㎡の範囲内で平安時代中頃と推定される掘立柱建物6棟・溝・土壌等を検出した。掘立柱建物はその規模から2間×5間のものと2間×2間の総柱のものに分けられる。前者は、方形の柱穴で一辺0.8～1.0mにおよぶ規模の大きなものであり、直径0.3～0.4mもの柱材が残存しているものがある。これに対し、時期が若干前後すると思われる後者は掘り方も0.4～0.5mと小規模で柱間も狭く、倉庫的な建物であったかと思われる。

また、八坂神社南側の水田中からは表土下0.6～1.2mの暗茶褐色粘質土内より二次堆積したと思われる平安時代の瓦が多量に出土した。凸面の調整は縄目

叩きのものが多いが、格子叩き、ナデ調整のものもみられ、中には焼成をうけて変形したものや窯の溶壁の付着したものも認められることから周辺に焼成窯の存在を予測させる。なお、先に述べた掘立柱建物の検出面からも瓦片が出土している。



絵馬



柱材出土状況

以上のように掘立柱建物の規模、柱の大きさ、墨書土器の出土、瓦窯の存在の可能性などからみて当初予想された寺院に直接つながるものか否かは判別し難いが、何らかの比較的大規模な公的施設がこの地に平安時代を中心に存在していたことは確かであろう。

(助産賀県文化財保護協会 吉田 秀則)

17. 5.5cmの銅鐸形銅製品

彦根市松原町 矢倉川口遺跡

矢倉川口遺跡は彦根市松原町の旧松原内湖北岸付近一帯に所在する縄文時代～近世にかけての複合遺跡である。今度、この地に広域下水道の浄化センターが建設されることとなり、59年度の試掘調査の成果を基に、60年度より発掘調査が開始された。

60年度の調査は浄化センターへの進入道路用地にあたる、丘陵からその裾の部分の5,000㎡余りを対象に行われた。その結果、丘陵上から斜面にかけては遺構・遺物の存在は認められなかったが、傾斜変換点よりも旧内湖寄りで縄文時代後期・同晩期・弥生時代後期・奈良時代等の良好な遺物包含層と若干の遺構が検出された。

縄文時代の遺構には土壇3、遺物には後期後葉と晩期末を中心とする大別2期の土器の他、丸木舟片・櫂等の木製品、石斧・凹石等の石製品がある。

弥生時代の遺構には井戸3（内2基は丸木刳貫の枠を有する）・土壇7・住居の痕跡と思われる細溝とピット群等がある。遺物としては後期のものを主体に、土器がコンテナ200箱程度採集された他、土錘、石器類、木製農具類もある。また、素文で小型の銅鐸形銅製品（高さ5.5cm）・銅鐸の出土もみた。

奈良時代に属すると思われる遺構には、竪穴住居1、土壇1、足跡等がある。遺物には須恵器・土師器の他、多量の土錘や種々の木製品等がある。



5.5cmの銅鐸形銅製品

60年度の調査は腐植泥質の遺物包含層を何層にもわたって除去していくという正しく泥まみれの作業が中心であったが、その成果は各期における湖岸の人々の暮らしの一端を知る上で、また湖岸線変動の問題を考える上で、貴重な一資料を追加することになるものと思われる。

(助産賀県文化財保護協会 濱崎 悟司)

18. 池泉式庭園

彦根市 彦根城表御殿遺跡

表御殿跡は、彦根城天守がそびえる彦根山のふもと、表門跡を入った箇所にある。表御殿は彦根藩の政務をとり、あわせて藩主などが日常生活を営む書院造りを主体とする建物である。元和8(1622)年頃までに造営され、一部増改築を施しながらも、江戸時代300年間の風雪に耐え、明治10年前後に解体された。今回、昨年度の全域的な発掘調査に引き続き、庭園部分の復元を前提とする発掘調査を実施したので、その概要を記すことにしよう。

表御殿は、発掘調査や絵図の検討から、大きく3期(I～III期)に分けられるが、庭園はII期以降、奥向きの茶室や御座之御間などの棟が造営されるとともに築かれたようである。従って、回遊の形態をとってはいるものの、御座之御間などから鑑賞することに力点の置かれた、池泉式庭園である。

II期には、対岸の築山側に数寄屋と待合が造られ、数寄屋の間をぬって迂曲する曲水風の流路が3条、池頭に導かれている。この水源は、遠く旧外堀の位置にあたる城東小学校裏手の元樹より、墳出水圧を利用して樋で導水してきたもののようである。池をとり巻く護岸の景石は、良く当初の面影を残しており、池底には玉砂が敷き詰められている。池をまたぐ橋の位置も2か所で確認される。御座之御間より池にのぞむ位置には札拝石が据えられているが、対岸の守護石や雪見燈籠については、その位置を確定できるものの現存しない。池尻は、石組みの開渠間をオーバーフローさせて排水し、途中から漆喰管の暗渠によって溜料に貯水される。溜料を再びオーバーフローした水は、石や漆喰製の暗渠を通して内堀に流入している。

III期になると、建物が池頭の方にさらに拡張されたようである。それに伴い池頭も延長され、蛇行する遺水の細長い流れが付加される。流れの底部や護岸の景石は漆喰で塗り込められ、漆喰が水で洗われることのないように玉石を敷き詰めていた。

(彦根市教育委員会 谷口 徹)



庭園の発掘

19. 古墳時代後期の小円墳と土墳墓

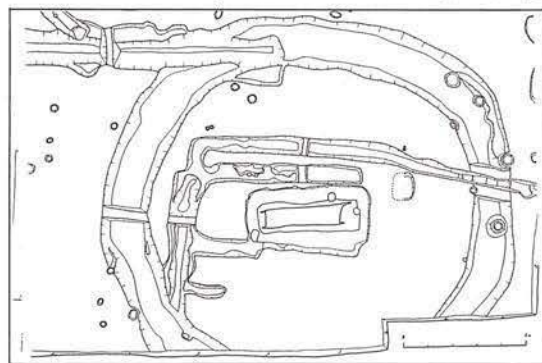
彦根市西葛籠町 葛籠北遺跡

葛籠北遺跡は、西葛籠町の集落の北、旧中仙道と国道8号線にはさまれた地域に所在する。地形的にみれば、旧犬上川デルタが現在の集落から認められ、その中に位置している事により犬上川水系の遺跡であると言える。

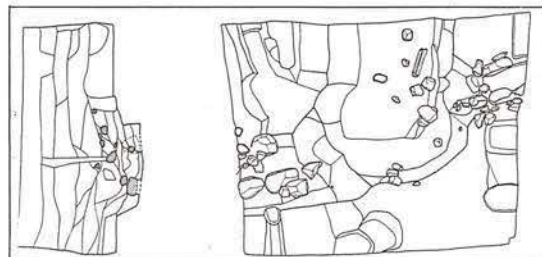
調査は、昭和59・60年度にわたって実施したもので、飯市立第2南中学校建設に伴うものである。確認した遺構の全容は、古墳時代後期の小円墳8基、同時代の土墳墓5基、奈良時代の掘立柱建物跡4棟以上、中世土壇、近世溝等である。このうち、1号墳では主体部が確認され、その葬制が明らかになったので記してみたい。

1号墳は、調査地の南端で検出されたもので、直径約15mを計る円墳で、現状で幅2m、深さ70cmの溝がめぐらされていた。主体部は5×2mの土壇を作り、その中に木棺を直葬していた。木棺は組合せ式のもので、全長約2m・深70cmを計り、側板の外側には板を固定する為と思われる白色の粘土が板にそって認められた。木棺は全体に朱が塗られていたらしく、内部全体に朱が散布していた。副葬品は、棺の南西側に須恵器群・中央部東側に鉄製品、また須恵器群の反対側には埴の蓋と身が伏せて置かれていた。

他の古墳は、ほとんどが削平を受けて周溝だけを確認したものであるが、1基だけ2×2mの浅い掘り込



葛籠北遺跡 1号墳



池状遺構と石組みの溝

み中底で河原石を敷いたものが検出できた。地元の人の話しでは開墾の時に平たい石を掘り出したとの事であり、横穴式石室の痕跡と考えている。また、これ等の古墳の間には、木棺の痕跡が残る土壇を数か所確認しており、小円墳と土壇墓の組み合わせられた墓域として考えねばならないだろう。

(彦根市教育委員会 本田 修平)

20. 肥田城跡の調査

彦根市肥田町 肥田城跡

肥田城跡は近江国の雄佐々木氏の被官であった高野瀬氏の居館跡として知られ、宇曾川の中流左岸に在り、現在その地は肥田町の集落となっている。この集落の南西側の境に土塁跡、あるいは、その外側の濠跡かとも思える一段低い水田があり、古地名などと併せて往時の姿を偲ばせている。

発掘調査は宇曾川災害復旧事業による改修工事に伴い行われているもので、1984年には代替地の調査が、そして今回、1985年は城跡内の試掘調査が行われている。

今回の調査は県教委、滋賀県文化財保護協会の手により、整理も含めて1985年7月～1986年3月にかけて行われているもので、現地では6か所のトレンチ、あるいは、グリッドを任意に設定し、遺構の広がりやその状態を探る試掘調査として行った。その結果、以下の諸点が明らかとなった。

遺構として確認したのは土壇跡、掘立柱跡、溝跡、通水・貯水施設跡などであり、いずれも制限された調査のため、その規格等については言及出来ない。それらの遺構は大きく3時期に分別出来る。即ち、古墳時代初、室町時代後期、江戸時代以降である。このうち前二者は現表土下・120～100cm程の黄褐色粘質土、あるいは砂質土に掘りこまれたもの、さらに江戸期のそれは前記の遺構上に約50cmの盛土を搗き固めた上に営まれている。付言すれば、最下面の二者は略々同一面に営まれるが薄い版築面が設けられて明確に分かれ、さらに室町期の遺構は焼土・炭化物が堆積するものとするのでないものの二類があり細分化が出来る。なお、遺構として明確にし得たものとして図示した貯水施設とそれとの通水・排水用石組みがあった。

遺物としては古墳時代の土師器、壺・甕類、室町期の信楽、鉢・甕類、中国舶載の青磁碗、かわらけの類。江戸期の染付碗・皿類、備前の甕、信楽の鉢を主体とし、その他傍流の遺物として古墳～奈良時代の須恵器、緑釉、土師器、鎌倉期の土師質・黒色土器もある。

以上から、現在の集落下には肥田城の施設が全体に存し、その他の時期の遺構、遺物が存することが判明した。(滋賀県埋蔵文化財センター 松沢 修)

21. 古代末の集落跡

能登川町今 柿堂遺跡

柿堂遺跡は能登川町大字今に所在し、県道長浜～大津線の北西側に位置する。工場建設に先立つこの調査は本年度で3年目を迎え、先年同様今調査も貴重な遺構の検出を見ている。

今調査における主な検出遺構を調査地の北西側から順に述べると、東西方向の奈良～平安時代初頭の溝、弥生時代後期の溝、方形周溝墓、平安時代後期の掘立柱建物、同期の井戸・土壇・溝等である。このうち方形周溝墓は5基認められるが、掘込み調査を次年度に行う予定のために現時点ではその時期は不明である。しかし弥生後期の溝を避けた配置プランを持っており、これとほぼ同時期のものと考えてよいだろう。一方平安時代後期の遺物を出土する溝は、調査前まで残存していた北東～南西方向の条里畦畔に沿って検出され、西から2条はほぼ一町間隔で、東の1条はほぼ30間間隔で存在している。さらに前述の掘立柱建物はおおよそ3群に分けることができ、それぞれの建物群は条里溝に区画された一坪単位の東側に偏在することが認められるのである。

また、調査地の中央部東寄りの溝沿いに検出された素掘りの井戸は、掘立柱建物と条里溝の間に開削されており、墳底に曲物が据え付けられていた。この曲物は青灰色砂層上に検出されたものの、検出面から墳底までは約0.8mと浅く、この時期の地下水位の高さが窺えるものである。井戸の埋土からは土師器皿、黒色土器の碗や皿、白磁片などに伴って両削ぎの箸が多数検出されており、往時この地に暮らした人々の生活痕跡が生々しく伝えられている。

以上の調査結果から、当遺跡が古代末の荘園制崩壊に伴って各地に施行される、条里再開発の実態を解明する一資料として、注目に価するものである。

(能登川町教育委員会 植田 文雄)



空からみた調査地

22. 縄文後期の深鉢・古代末の建物跡

能登川町今 今安楽寺遺跡

今安楽寺遺跡は能登川町大字今の北東部、県道長浜～大津線と国鉄東海道本線に挟まれた所に位置する。調査は工場建設に先立ち、昭和60年9月～10月中頃迄かけて実施したものである。主要な検出遺構は、縄文時代後期の深鉢を出土した落ち込み、弥生時代中期後葉の方形周溝墓、弥生時代後期の溝、平安時代後期の掘立柱建物等である。

縄文の深鉢は、肩部から深い方へ落ち込む状態で検出されたもので、落ち込みの上位を弥生時代後期の自然河道に切られている。深鉢は有文精製・無文精製のもの1個体ずつあり、いずれもほぼ完形に復元できるものである。有文の深鉢は、口径38cm、器高50cmを測り、4頂の波状口縁をもついわゆる縁帯文土器である。無文の深鉢は口径41cmを測り、やや張りのある体部から外反する口縁をもつものである。これらはいずれも縄文時代後期中葉に比定できるものである。

一方平安時代後期の掘立柱建物は、2間×3間の身舎に四面廂の付くもので、同規模のもう一棟と重複して検出された。これらの柱穴からは平安時代後期の土師器皿、黒色土器等が出土しているが、中でも一つの柱穴からは実用の下駄が検出された。これは台長13cm、幅8cmを測る小型のもので、出土状況から礎板に転用したものとも考えられる。またこの建物の柱筋は、当該地に散見される残存条里の軸方位に近似するものである。さらにこれは、一坪を一区画とする南隅に位置し、比較的短期間で廃絶されていることが特徴的で、当該地域の条里開発にかかわった集落の一部と考えられ、古代末に起る農村集落の解体と再構成を考察するうえで、これまでの資料に厚味を加えるものと言える。

(能登川町教育委員会 植田 文雄)



縄文土器出土状況

23. 火化された土壇墓検出

蒲生町川合 川合古墳群・本郷遺跡

昭和60年8月から、蒲生町川合において団体営は場整備事業に伴う発掘調査を約4か月を要して実施した。

調査の結果、古墳時代後期（7世紀初頭）の土壇墓9基と奈良時代前期から平安時代初頭の掘立柱建物跡4棟以上、溝跡5条以上、土壇等を検出した。土壇墓は、水田より一段高い畑地から検出されたもので、何れも長方形の平面形態を呈し、大半が長辺2.2m、短辺0.8m、深さ0.5mの規模をもつ。最大は長辺2.25m、短辺1.65mを測る。土壇墓は6小群に分類でき、うち



土 墳 墓

3小群が2基で群を形成している。3小群4基の墓壇内埋土中層および下層に焼土、焼灰が含まれており、最大の土墳墓は壁面の中位から上位近くにかけて火が加えられた形跡がある。日野町小御門古墳群、愛知川町塚原古墳群でみられた「かまど塚」と同様の葬法を採用した土墳墓として、被葬者の特異性が窺える。副葬品としては、須恵器杯、壺、高杯、匙や鉄製品の小刀・刀子・鋏がある。

掘立柱建物跡は、土墳墓の南、西方で2間(3.9m)×3間(5.0m)の東西棟、2間(5.0m)×3間(5.0m)の総柱建物を含む5棟以上が検出された。建物方位は、ほぼ南北にあり、周辺の出土遺物から奈良時代前期を中心とする集落とみられる。前年度調査で、割貫き井戸が検出され井底より「林」の墨書土器が出土しており、公的機能を有する遺跡である可能性が高い。この他、遺跡の西を限る幅3mと1mの大溝2条が並行して検出され、東西350mに及ぶ広範な遺跡であることが明確となった。(蒲生町教育委員会 北川 浩)

24. 弥生時代中期後半の周溝墓群

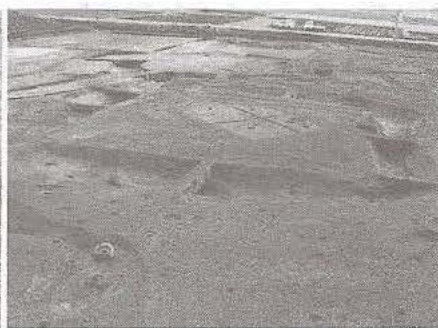
蒲生町市子 市子遺跡

昭和60年6月から、蒲生町市子殿、上南において県営は場整備事業に伴う発掘調査を約8か月を要して実施した。

調査の結果、弥生時代中期後半の方形周溝墓20基、後期の竪穴式住居跡3棟以上、溝跡、土壇等、古墳時代中期の土器溜り、平安時代後期の掘立柱建物跡4棟以上、土壇、溝跡などの4時期の遺構を確認した。

方形周溝墓は、全て単独で築成されており、数基が切り合い関係にある。規模は、墳丘部で、一辺6.6～13.5mまであり、12m前後が大半を占める。

方形周溝墓群に重複して弥生時代後期の竪穴住居跡を検出したが2棟を除き、大半が後世の削平を受けており、柱穴、貯蔵穴を残すのみであった。柱穴の位置関係から数回の建て替えが想定される。また、集落の東外郭をめぐると思われる幅5m深さ1.5m以上の大溝1条を検出した。



方形周溝墓

以上、土壇・溝跡を検出した。建物方位は、蒲生郡条里とはほぼ合致している。この地域は、春日神社々領である「市子荘」に比定されており、本遺跡も荘園内に発達した集落の一端を示すものとして理解されよう。

(蒲生町教育委員会 北川 浩)

25. 日野川中流域の大複合遺跡

蒲生町上麻生・下麻生・岡本 麻生遺跡

麻生遺跡は日野川中流域右岸の河岸段丘上に立地する。今回の県営は場整備に伴う発掘調査により、縄文時代晩期から現代に至る、各時代の遺構を検出した。時代順に述べると、縄文時代晩期は東海系の馬見塚式の甕が出土しており、調査中である。弥生時代は後期の方形周溝墓3基を検出した。古墳時代は5世紀後半から6世紀後半にかけての竪穴住居が、南北400mの範囲内で2群以上に分かれて10棟以上を検出した。そのなかで、貯蔵穴に木製の蓋をもつものがある。他に、布留式の新段階の一括遺物を出土した溝がある。奈良時代では、平行する2条の溝にはさまれた幅2mの道路敷と思われる遺構を検出した。その延長上の現集落(下麻生)内では、和同開珎の出土が伝えられている。他、山部赤人伝承を持つ山部神社と赤人寺がある。平安時代前期は、6間×3間、3間×2間の規格性の強い掘立柱建物群を検出した。今回の調査で最も注目されるのは、山部神社所蔵の中世文書に記された「麻生荘」関連の遺構群である。まず、11世紀後半から12世紀にかけての掘立柱建物群が、調査区北西部で集中して検出された。これらの建物群は南北約100m、東西約50mの範囲内に数十棟が建てられている。なかでも中心的な建物がある区域では数度の建て替えが行われている。また、この区域内には、白磁碗や土師皿を副葬した屋敷墓の他、土壇数基を検出した。13世紀～15世紀では、現在の集落とはほぼ重なりあって遺構が存在する。岡本の集落西部では、従来より水晶の採集が知られていた。今回の調査では、掘立柱建物とともに、溜枘状の石組土壇や溝から玉砥石十数点を検出した。

(助産賀県文化財保護協会 岡本 武憲)